

祇園町と夏目漱石

京都には現在、祇園甲部、宮川町、先斗町、上七軒、祇園東の5つの花街があり、これを総称して五花街(ごかがい)と呼んでいます。伝統ある礼儀正しいしきたりが今も守り続けられているのは五花街の中でも祇園甲部が一番と言われています。八坂神社の門前(祇園石段下)を四条通り沿いに西へ100mばかり歩くと左角に一力茶屋が立っています。この角を南北に走っている通りが花見小路、左右に祇園甲部のお茶屋が並んでいます。江戸時代初期に八坂神社の門前で水茶屋を営業したのが始まりで、明治5年、東京奠都で寂れかけた京都を立て直そうと、榎村正直(明治8年に京都府知事となる)が京都博覧会の余興として、祇園の芸妓・舞妓の舞を「都をどり」と名付けて開催し、これが評判となって以降、京都の花街として発展し今の姿になったとの歴史があります。明治末期から戦前の昭和にかけて祇園に遊んだ文人墨客は数知れません。

御池大橋西詰(鴨川の西岸、ここから祇園町界限へは鴨川を渡り東南方向に歩いて15分くらいか)に、夏目漱石の句碑が立っています。

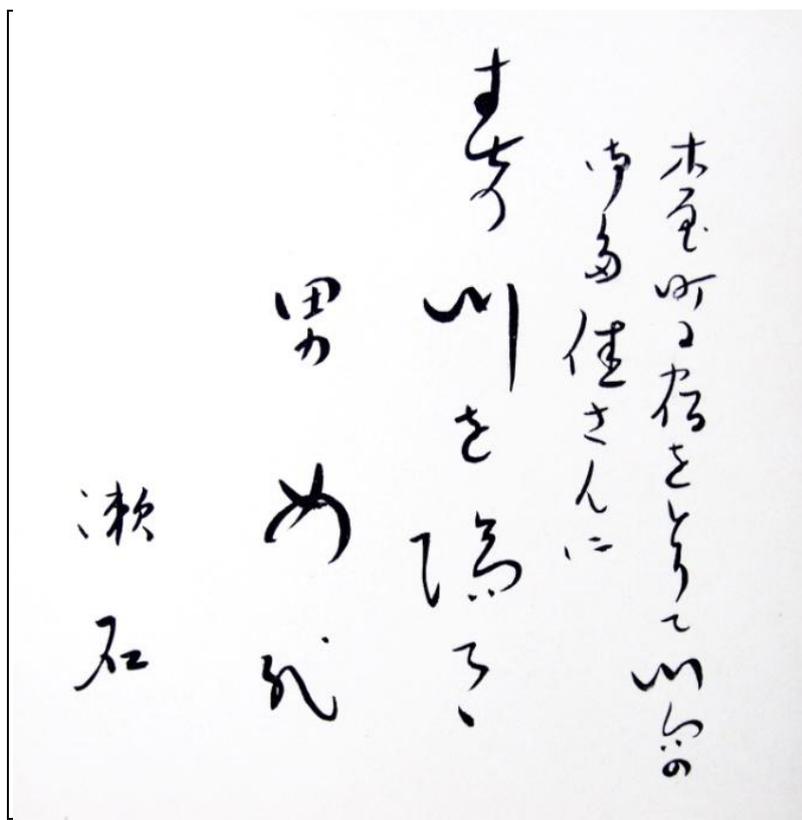
「春の川を隔てゝ男女哉(おとこおみなかな)」

天の川を隔てゝ男が女を想う甘美なひびきの名句です。また一方、男と女の間にある隔て、心理的な溝の存在を示唆していると見方もできます。この句にからむ漱石の祇園でのエピソードが面白いのでご披露したいと思います。





漱石歌碑



漱石筆の色紙

漱石がこの句を書いた色紙（しきし）は今も残っていますが一写真参照—「木屋町に宿をとりて川向うのお多佳さんに」との前書きがあります。「お多佳さん」こと磯村多佳は祇園新橋のお茶屋の二女として出生。父親は下級武士の出で、母親は祇園の芸妓。茶屋といっても暗い環境ではなく平穏な家庭に育っています。美しい芸妓の姉は万亭（一力）に嫁ぎましたが、多佳は三味線の弾き手となり、また和歌、俳句、書画を熱心に学んだ才女でした。しかし、花街の芸妓という期間は多佳が23歳ころまでで、すぐに母の経営になる祇園の茶屋「大友」（だいとも、大和大路白川から白川沿いに東へ、巽橋（たつみばし）の手前。終戦直前に強制疎開で壊されて今はありません）を継いで女将（おかみ）となっています。「大友」は吉井勇の「かにかくに祇園は恋し寝るときも枕の下を水のながるる」（「大友」のあった白川畔に歌碑あり）で知られた料亭で、吉井勇をはじめ、尾崎紅葉、谷崎潤一郎、高浜虚子、横山大観、藤田嗣治、浅井忠（フランスへ絵画研修、帰国後本学の教授）等々、名士たちの集う文芸サロンとなっていました。



多佳



漱石(45歳)

水川隆夫著の「漱石の京都」によると「漱石は、その50年の生涯の間に4回の京都への旅を試みた。第1回は明治25年（1892）26歳、第2回は明治40年3月～4月、41歳。第3回は明治42年、43歳。第4回は大正4年（1915年）3月～4月、49歳、29日間」と書かれています。

二度目の京都旅行の折に書いた小品「京に着ける夕」では、七条のプラットフォームに降りて、ここから下加茂、糺の森の宿坊までの遠い夜道を人力車に乗って行く情景が記されています。京都の残寒（3月）に辟易しており「東京を立つ時は日本にこんな寒い所があるとは思わなかった」と書いています。途中で「ぜんざい」と書いた赤提灯を見て「余はいまだにぜんざいを食った事がない。汁粉であるか、ゆであずきであるか、何ものであるかさえ弁

えぬ。「はじめて京都に来たのは十五、六年の昔、正岡子規と一緒に麩屋町の「柵屋」に宿をとった」とも書いています。その年の6月には「虞美人草」の連載を始めます。書き出しの部分で東京からやってきた友人二人が七条あたりの鴨川沿いの宿に泊まり、近くの家からの琴の音を聴いています（琴の主はしとやかな京女として話に登場します）。ここから比叡山にまで歩いて登り、山道で粗朶（そだ）の大束を髪の上に乗せた大原女が「ごめんやす」と言ってすれ違うくだりがあります。「虞美人草」では男女間の感情の変化、展開が読み手を引きつけ、ドラマティックな終末が印象的です。

漱石が多佳に出会ったのは大正4年3月、漱石49歳、小説「こころ」（読後、色々と考えさせられるところがある名著と言えましょう）を書いた直後、多佳は36歳でした。漱石にとっては持病の胃病と鬱病の保養を兼ねたゆったりとした京都旅行でした。京都着の翌日、同行の画家、津田清風の案内で京都市内を散策し、木屋町御池（句碑の立っている場所）の宿「北大嘉」に戻ると、夕食時に多佳がやってきました。漱石を楽しませようと清風が呼んだのです。漱石はご機嫌で多佳と意気投合、深夜まで歓談しました。漱石は終始、対等の相手として親しみ深い態度で接しています。かねてからひそかに尊敬し愛読していた文豪から声がかかった幸運を多佳も感激したようです。ところがここで漱石はひどく体調を崩し、宿の「北大嘉」で二晩も寝込むことになりましたが、多佳は足を運んでかいがいしく看病しました。回復した漱石は多佳に「天神様（北野天満宮）に梅を見に連れて行ってくれ」と声をかけました。翌日の3月24日、天神様で多佳を待っていても一向に現れないので大友に問い合わせると、ある人物と宇治へ出かけたという。漱石は振られたとの思いで腹を立て市中を歩き回り、宿に戻って多佳に与えた色紙が「春の川を隔てゝ男女哉」だったのです。多佳のいる「大友」は漱石の宿「北大嘉」とは鴨川を挟んで川向かいになるわけです。約束が守られなかった、その心の間隙を詠んだものとも見ることもできるのです、立腹することがあったにせよ、こゝ京都の地で親身になって世話をしてくれたお多佳さんへの感謝の気持ちでこの句を書いて与えたのだと思われまふ。病気が落ち着くのを待って漱石は京都を離れました。都合29日間の京都旅行でした。帰京後、漱石はこんな手紙を多佳に送っています。「御前は僕を北野天神様へ連れて行くと云ってその日断りなしに宇治へ遊びに行ってしまったじゃないか」。漱石通の諸氏は本件について色々な憶測をされていて面白いです。曰く「京都で天神さんといえば25日の縁日のこと。多佳は25日と考えたのでは」。一方「犯人は京ことば」との指摘、同じ「おおきに」でも、ニュアンスの違いで辞意にも歓迎にも意味が変わる京ことばの特質が漱石を勘違いさせたのでは。多佳は「おおきに」と返事をしたが、約束した意識はなかったのではなからうか。

帰京後、漱石は完結した小説としては最後の作品「道草」を書き始めます。この後、「明暗」の連載中に胃潰瘍のため亡くなりました。多佳との出会いは漱石がこの世を去る前年の春寒の頃のことでした。「春の川」の句碑が立てられたのは漱石生誕百年を記念しての1966年12月のことです。

一方、多佳は昭和20年（1945年）5月、85歳で亡くなっています。終生、雨の日と紫陽花（あじさい）の花を好んだと言います。白川辺の巽橋（たつみばし）の西に元あった「大友」の庭には紫陽花が植えられていた由。

それでは、お多佳さんに贈られた文人客の手向けの歌をこゝに。

「あじさいの花に心を残しけん人のゆくへもしら川の水」 谷崎 潤一郎

「年ごとに君がこのめる紫陽花の花は咲けども多佳女世になし」 吉井 勇

S35年卒 松岡謙一郎